

君、死にたもうこと勿れ
(前に向かって ぼくらの好きな人々よ)

.....

円い空がきれいに澄んでいる
鳥が散弾のように僕のほうへ落下し、幾粒かの不安に変わる
僕は拒絶された思想となってこの澄んだ空を掻き乱そう

.....

かつて戦後の焼け野原に立った若き日の詩人は空に向かって決然と叫んだ。それは一夜にして価値観が180度回転する中で、何処へ向かって歩めばいいのかわらなくなってしまった若者が、それでも前に向かって進もうとした時発した時代の叫びのようにも聞こえる。.....

銀行を辞めて解ったことが幾つかある。その一つに「事業経営者の位置」と表現出来るものがある。銀行員時代にも多くの中小企業経営者と接してきたが、その経営者の位置といったものに思いは及ばなかった。中小企業経営者は倒産すれば全てを失う、この常識的な認識は頭では理解できても体で実感することは出来なかった。それが曲がりなりにも実感出来るようになったのは、自分が所謂サラリーマンの位置から抜け出て所得ゼロの立場に立ったこと、会社の整理清算を身をもって体験したこと、そして多くの中小企業の現実を肌で触れることが出来るようになったことと無縁ではないように思う。

何故こんなことを書き始めたかと云えば、昨年頃から中小企業経営者の自死を耳にするようになったからだ。そして今週、そう遠くないところで自死を選んだ経営者が発生した。その方とは何の面識もないが、そうした事実が瞬く間に広まって行き、そうした事実が多くの中小企業経営者に少なからぬ動揺を与え、そうした事実が確実に気持ち重く沈めるように働くことを目の当たりにし、どうしても書かざるを得ないと思ったのだ。そして云いたい。かつて明治の昔、与謝野晶子という女性歌人が戦場に向かう男達に捧げたという詩歌と同じく「君、死にたもうこと勿れ」と。

私の如き実績もなく、借金の重荷も知らない駆出しの人間に何が解るかと怒られるだろうが、それでも「何も死ぬことはない」と云いたい。人が自ら死を選ぶ時の必死の思いを実感することは

出来ないが、事業の行き詰まりを死と交換したいと思う時の心情はかなりの数の経営者がそれなりに理解できる心情に違いない。だからこそ、自分と同じ経営者の最後の選択に心が揺さぶられるのだと思う。そして、だからこそ繰り返して「何も死ぬことはない」と云いたい。

事業が失敗すれば死を以って償わなければならないことがあるのか？ある筈がない。債権者の方々に迷惑をかければ万死に値するのか？そんなことはある筈もない。そもそも人間とは、裸で生まれて自然死して行くまで失敗と迷惑の連続でもある筈だ。だからこそ、人はそれぞれ単独の存在でありながら集団で生きて行く他ない存在なのではないか。

たった少しの成功で酔い痴れることも馬鹿げているが、少しばかりの失敗で人生を閉じることはもっと馬鹿らしい。冒頭の詩人が叫んだ戦争直後とそれからの苦難を想えば、私達の置かれた現在など何程のことがあろうか。獲得した少しばかりを捨てて、素直に謝れば良いことではないか。自死とは何かを墓場に持って行こうとする行為のように見えるが、自然死を見るまでもなく人間は最後まで裸で還ってゆくのではないか。

それでも死を迫るものがあるとすればそれは何だろうか。先ごろ長銀の元副頭取が死を選んだが、彼を死に追い込んだものは何なのか。おそらくエリート・サラリーマンと中小企業経営者の自死を比べても仕方ない。中小企業経営者は自宅を担保に入れ自社債務の連帯保証人となって銀行から資金調達している。経営が破綻して地位や名誉は失っても、自宅まで失うことのないサラリーマン経営者と基本的に違うのだ。

信用を失うだけでなく家や財産を失い、家族や従業員を路頭に迷わす経営破綻に耐えられない心やさしき中小企業経営者達。それでもその及ばず範囲を出来るだけ小さくするために何をしなければならぬか。同じ債権者でもプロの債権者(金融機関)と一般取引債権者とは違うのではないか。何処まで踏ん張って何処で幕を引くことがいいのか。

この困難な時代が、それでも新しい展開の中で、失敗を許し何度でもチャレンジする精神を尊ぶ風土を育てるように進むことを願う。そうではないだろうか、ぼくらの好きな人々よ。